斑鳩地域の慶長期神社建築

－斑鳩神社・菅神社を事例に－

はじめに　平成29年度より、奈良県では文化財保護施策の基礎資料とするため、奈良県内の社寺建築の悉皆調査をおこなっており、本事業において、奈文研は調査協力として参加している。そのなかで、斑鳩町に所在する斑鳩神社惣社および五所社、菅神社本殿に、中世に遡る建築様式が確認されたため、再度、詳細な調査を実施した。本稿ではその調査成果を報告する。

斑鳩神社惣社および五所社　斑鳩神社は法隆寺西院伽藍の北東、天満池東の小高い丘の上に位置し、社殿は西面して建つ。拝殿の奥に瑞垣をめぐらし、南から、大将軍社、本殿、惣社、五所社と４棟が並ぶ。惣社と五所社はかつて法隆寺境内に所在したが、明治時代の廃仏毀釈の際に、現在地に移築されたものである。

惣社は一間社春日造、本瓦葺である。各構造形式は表９の通りである。惣社の具体的な建立年代は不明であるが、文献史料には元禄元年（1688）に修理、安永７年（1778）に屋根葺替えの記録が残る。身舎柱や切目長押、内法長押、頭貫などに当初部材が確認でき、南面の蟇股や庇の頭貫・組物は近世後期頃の取替え材で、庇柱や土台、繋虹梁、身舎組物、一部の垂木を除く桁材以上の屋根まわりは明治期の取替え材、その他には昭和期にも一部修繕が加えられているとみられる。建立年代は当初材の風食度合いや実肘木などの渦絵様の形状から、慶長期（17世紀初頭）と考えられる。

五所社は一間社春日造、本瓦葺で、惣社に比して小規模な社殿である。具体的な建立年代は不明であるが、文献史料から、元禄３年（1690）年と天保11年（1840）の修理記録が残る。身舎柱や庇まわり、木階、脇障子に当初材が残り、土台や切目長押、扉まわり、繋梁、一部の垂木を除く桁材以上の屋根まわりは明治期の取替え材、内法長押や高欄などは昭和期の取替え材とみられる。庇鼻隠板の渦絵様の形状や当初材の風食度合いから、五所社も慶長期（17世紀初頭）の建立と考えられる。

惣社および五所社には、蟇股や木鼻の形状に中世の意匠的特長がみられるが、近世初期の特徴を示す渦絵様をもつ当初材もある。惣社は中世の様式を守りながら、非常に端正に造られ、当初材も良く残り、小規模ながら正統的な社殿といえよう。五所社も惣社と同様に、中世の様式を留めた意匠をもち、簡素な造りながらも、近世後期の改造はほぼ見られず、惣社よりも建築当初の形状を良好に残している。両社とも法隆寺境内から移築されたことがあきらかで、法隆寺の慶長期建立の小社殿として貴重な事例である。

表９　各棟の構造形式

	基壇礎石	軸部	組物	縁・高欄	軒	屋根/妻飾	柱間装置	庇	彫刻	塗装	材質
斑鳩神社惣社	モルタル切石礎石	土台 丸柱（φ＝162）、 切目長押、内法長押、頭貫、梁、桁	三斗 実肘木	脇障子、刎高欄 木階登高欄 親柱子持 浜床高欄簡略化	二軒繁垂木 飛檐垂木 （反り扱き）	本瓦葺 六葉猪目懸魚 家叉首	正面：板唐戸 妻壁：竪板壁 他：横板壁	切石礎石、几帳面取角柱（125角、面内103）、連三斗、打越垂木	身舎：頭貫木鼻、頭貫上中備彫刻蟇股 庇：中備彫刻蟇股	身舎：朱色 組物/木口：白色 垂木木口：黄色	マツ
斑鳩神社五所社	モルタル切石礎石	土台 丸柱（φ＝122）、 切目長押、内法長押、海老虹梁、梁、桁	舟肘木	土台上に縁束 脇障子、刎高欄 木階	一軒繁垂木 垂木反り	本瓦葺 六葉猪目懸魚 家叉首	正面：板唐戸 他：横板壁 床下：吹放ち	切石礎石、土台建角柱（90角、面内72）、虹梁形頭貫木鼻付、三斗実肘木、軒桁、打越垂木（やや反り）	庇：虹梁形頭貫拳鼻、中備彫刻蟇股	全体：赤色 身舎：正側面小壁彩色 木口：白色	マツ
菅神社本殿	土間礎石	土台 丸柱（φ＝116）、 切目長押、内法長押、海老虹梁、桁、梁	舟肘木	縁下腰組２段 縁束無 脇障子、刎高欄 木階登高欄	一軒疎垂木 （面取）	厚板瓦棒葺 千木堅魚木 家叉首	正面：透格子戸 内部：内外陣境板唐戸 他：横板壁 床下：横板壁	土台角柱（90角、面内67）、虹梁形頭貫木鼻付、出三斗、庇桁、海老虹梁、角棒一軒繁垂木（面取）	身舎：海老虹梁下拳鼻 庇：中備彫刻蟇股、虹梁形頭貫	軸部/組物：赤色塗装 板壁/軒裏/渦絵様：白色塗装	マツ 屋根厚板はヒノキか

※表内数字の単位はミリメートル

図40　斑鳩神社惣社　正側面（西から）

図41　斑鳩神社五所社　正側面（南から）

図42　菅神社本殿　正面（南から）

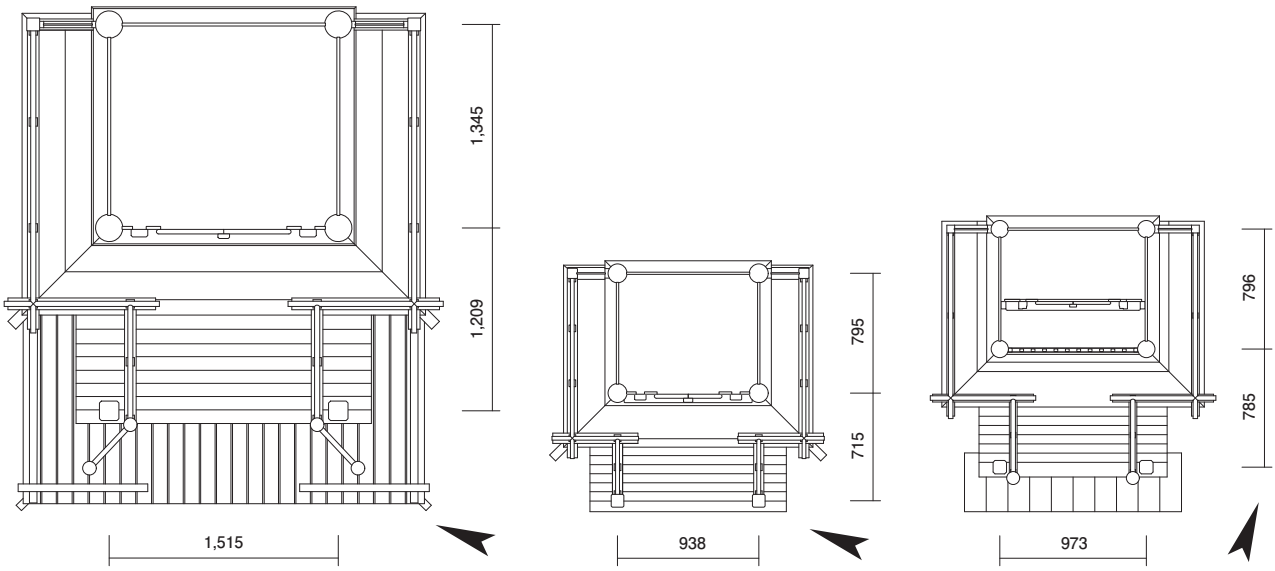

図43　平面図（左：斑鳩神社惣社、中：斑鳩神社五所社、右：菅神社本殿）　1：50

菅神社本殿　菅神社は法隆寺の南西、住宅が立ち並ぶ平地に立地する。境内中央に拝殿を建て、その北に南面して本殿が鎮座する。本殿の両脇には摂社が建ち、これら３棟を取り囲むように覆屋が建つ。本殿は奈良県近世社寺建築緊急調査の２次調査対象として、1985年に調査されている。本殿は一間社春日造、厚板瓦棒葺とし、各構造形式は表９の通りである。具体的な建立年代を示す文献史料はないが、釘の打替えはほとんどみられず、大きな修理や改造はない。屋根は当初から厚板葺で、雨ざらしとは考えにくく、建立当初から覆屋も存在していたとみられる。現在の覆屋は部材の風食度合いから大正期頃の建築であろう。

当社は小規模ながらも厚板葺の屋根で、身舎側面の垂木は４本のみの疎垂木とするなど珍しい特徴をもつ。木鼻に彫られた渦絵様の形状は慶長期の特徴を呈する。庇中備の蟇股や庇柱の面取り、木鼻や組物の形状は中世の意匠的特徴をもつが、渦絵様や部材の風食度合いはそこまで遡らず、慶長期（17世紀初頭）の建立と考える。

斑鳩地域の慶長期の神社建築　斑鳩神社惣社および五所社、菅神社本殿はいずれも17世紀初頭の慶長期の建立と考えられる。組物や蟇股の形状などには中世の特徴を色濃く残す。各社殿ともマツ材を多用し、法隆寺境内の建物でも、慶長の大修理でマツ材が多用された特徴があり、当時の材木調達の背景がうかがえる。いずれも中世末期の意匠を留めた慶長期の社殿で、斑鳩地域における慶長期の造営背景をうかがうことができる貴重な事例である。法隆寺を含めた当地域の慶長期の建築活動を知るうえで、各社殿の造営に関わった大工組織も重要であるが、それらは今後の検討課題としたい。　**（福嶋啓人）**

参考文献

高田良信『法隆寺辞典 法隆寺年表』柳原出版、2007。

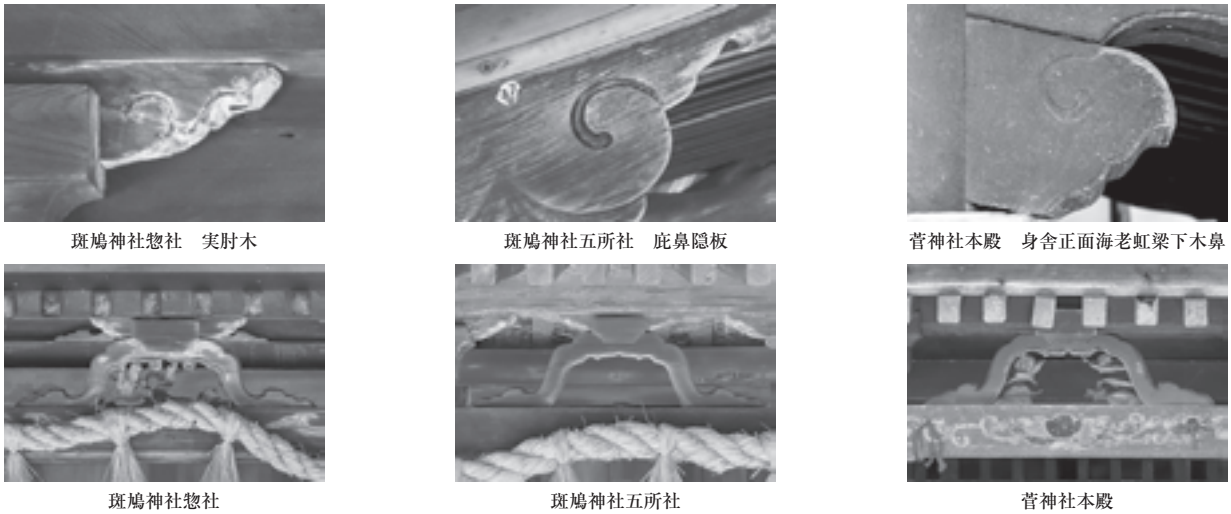

図44　各社殿の渦絵様（上段）と庇中備の蟇股（下段）